

II. 特別講演

胸部X線診断…単純写真, CR, CT

大阪大学医学部放射線医学教室助教授

池添潤平先生

第1回新潟消化器病遺伝子・免疫研究会

日時 平成6年10月14日(金)

午後6時~8時

会場 新潟グランドホテル

一般演題

1) 潰瘍性大腸炎粘膜局所における IL-8 mRNA の発現に関する検討

新井 太・高橋 達
古川 浩一・朝倉 均 (新潟大学第三内科)

【はじめに】潰瘍性大腸炎(UC)とIL-8との関連は、最近ではPT-PCR法を用いてmRNAのレベルで検討が進んでおりその重要性が注目されている。今回我々は、*in situ* hybridization法を用いてIL-8 mRNAの局在を組織切片上で検討したので報告する。

【対象と方法】活動期UC 10例、非活動期UC 5例、正常コントロール5例を対象とした。ヒトIL-8 mRNAに対するジゴキシングニンでラベルしたcDNAプローブをPCR法で作成し、hybridizationを行った。ジゴキシングニンに対するマウスモノクローナル抗体を反応後、金コロイド標識の2次抗体を反応させ、さらにこの金コロイドに対して銀粒子を凝集させるimmuno-gold silver staining (IGSS)法にて可視化した。

【結果】活動期UC 10例中4例に陽性細胞を認めた。これらはおもに粘膜固有層に浸潤したマクロファージ様の細胞であった。ステロイド治療不応例では粘膜上皮の一部にも陽性細胞を認めた。非活動期UCおよび正常対照群では陽性細胞は認めなかった。

【結語】1. UCの粘膜局所におけるIL-8 mRNAの局在を*in situ* hybridization法により証明した。2. その陽性細胞はおもに粘膜固有層に浸潤したマクロファージ様細胞であったが、粘膜上皮細胞陽性例も存在した。3. IL-8 mRNAの増加を介した蛋白の産生亢進がUCの活動性に強く関わっていることが示唆された。

2) 潰瘍性大腸炎に対するAzathioprineの効果と限界

月岡 恵 (新潟市民病院 消化器科)

難治性潰瘍性またはステロイド抵抗性の潰瘍性大腸炎15例にAzathioprine 50 mg または 100 mg を経口投与した。治療効果は著効7例、有効2例、無効6例であり、投与量による差は認めなかったが、慢性持続型の難治性潰瘍性大腸炎4例は全例が無効であった。ステロイド使用量はAzathioprine投与前の平均34.4 mg から投与後は平均6.9 mg まで減量が可能であったが、ステロイド減量中の再燃が有効以上の9例中7例で認められた。Azathioprineを中止した4例(無効例を除く)のうち3例は中止2カ月以内に再燃または増悪をきたした。対象例の長期経過では、再燃後に諸治療に反応しない例やAzathioprineの再治療効果が認められない例が多く、著効例の7例中5例、有効例の2例中1例に外科治療が行われた。

3) 大腸低異型度癌の遺伝子異常

吉田 光宏・佐々木正貴
人見 次郎・小林 正明
斎藤 英俊・味岡 洋一
渡辺 英伸 (新潟大学第一病理)

【背景】大腸癌は、細胞異型度から高異型度癌と低異型度癌とに分けられる。両者の生物学的悪性度は異なり、それぞれ高悪性度癌と低悪性度癌に相当する。

【目的】大腸低異型度進行癌の発生・進展過程における遺伝子異常を高異型度進行癌と比較し、その特徴を明らかにする。

【材料および方法】外科的切除された進行大腸癌53例(低異型度進行癌13例、高異型度進行癌40例)を対象に、p53遺伝子の突然変異をPCR-SSCP法により、K-ras遺伝子(codon 12)の突然変異をnested PCR; RFLP法により検索した。

【結果】p53およびK-rasの突然変異は、それぞれ低異型度進行癌の54.5% (6/11) および69.2% (9/13)、高異型度進行癌の76.2% (16/21) および32.1% (9/28) に認められ、K-rasにおいて有意差を認めた。

【考察】大腸癌の組織発生には、Adenoma-cancer sequence と de novo 発生の2つがある。前者ではK-rasの突然変異が高率であるのに対し、後者ではその頻度が低いとされており、低異型度進行癌の多くはAdenoma-carcinoma sequence を経るものと想定された。